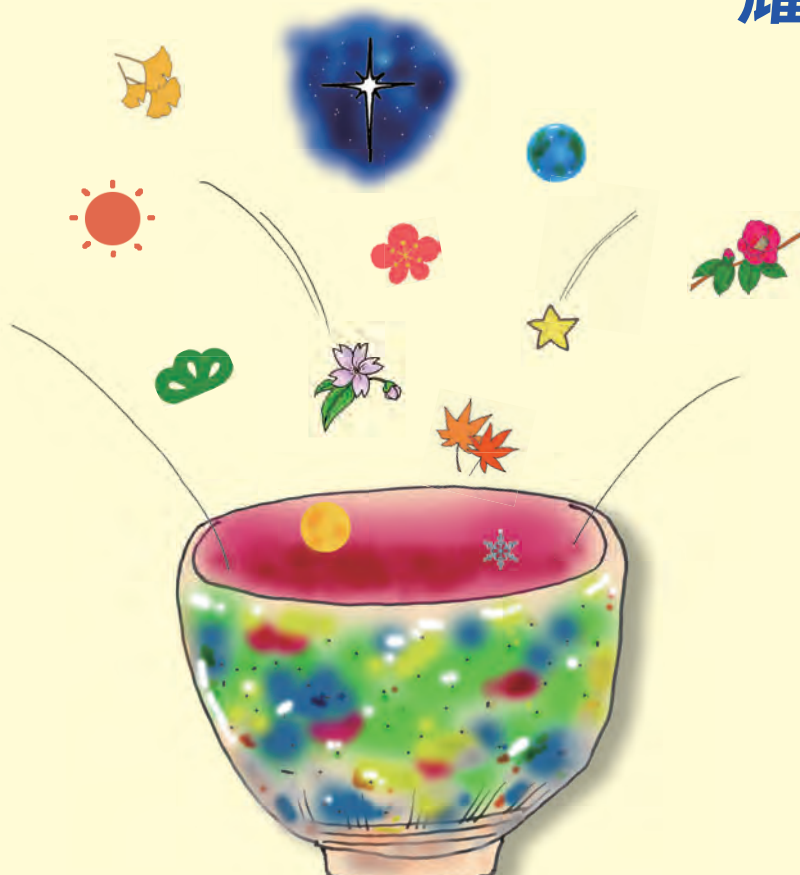


かがや 光り耀く " 宝玉 "

ようわん
— 耀盃 —



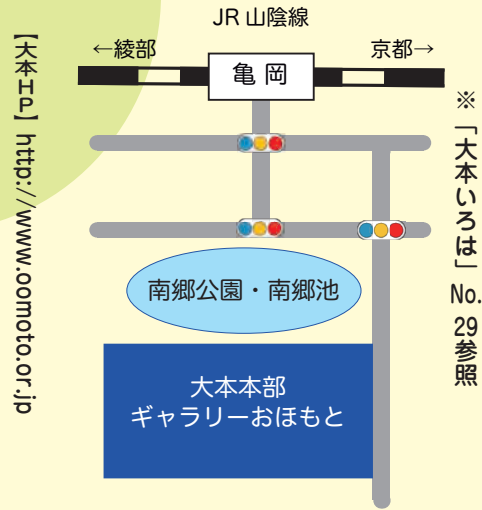
美しい風景や花などを見ると、私たちは「ああ、きれいな」と素直に感動しますね。人の心は穏やかになり、争いや憎しみといったマイナスの考えから遠ざかります。

こうした「美」の世界に感動することは、万人に開かれた、神さまに通じる道でもあるのです。

今回は、光り耀く宝玉のような茶盃「耀盃」を紹介します。



みろく博士



【大本HP】 <http://www.oomoto.or.jp>

京都駅からJR山陰線亀岡駅下車。
南へ徒歩約15分
※「大本いろは」No. 29参照

「耀盃」を見に行こう！
耀盃は、京都府亀岡市天恩郷の大本本部内にある、「ギャラリーおほもと」で常時展示されています。（展示内容は年に数回変わります）
また、全国各地で開催する出口王仁三郎聖師と出口家一門の作品展では、耀盃をはじめ、数多くの書画や焼き物などが展示されます。作品展の予定は、大本ホームページなどでご確認ください。（作品展は不定期で開催されます）

芸術は宗教の母

出口王仁三郎聖師は、森羅万象を神の芸術的作品と称え、「芸術は宗教の母」と示しました。

美しい自然に感動することは、それらを作った神さまや、その力の偉大さを感じることもつながります。こうした「美」から神さまに通じる道筋は、年齢、人種などの制限はなく、すべての人に開かれています。

耀盃には、王仁三郎が見てきた美しい自然の姿、天国の姿が凝縮されており、国内外を問わず、多くの人々の心をひきつけています。

王仁三郎が精魂をこめて作りあげた耀盃が、「美」を通して、私たちに何を伝えるのか。実際に見て、感じてみてはいかがでしょう。

大本本部
綾部・梅松苑 綾部祭祀センター
〒623-0036
京都府綾部市本宮町1-1 梅松苑 / TEL 0773 (42) 0187

亀岡・天恩郷 亀岡宣教センター
〒621-8686
京都府亀岡市天恩郷 / TEL 0771 (22) 5561

東京本部 東京宣教センター
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44 / TEL 03 (3821) 3701

大本ホームページ <http://www.oomoto.or.jp/>
※「大本いろは」は大本ホームページ（信徒専用ページ）から、カラーでダウンロードできます



<連絡先>

「耀盃」とは?

耀盃は、大本の教祖の一人、出口王仁三郎聖師が七十三歳の最晩年に作った楽焼き茶盃です。

えんじ、るり、黄、緑などのあざやかな色が特徴で、昭和十九年末からわずか一年三カ月の間に、約三千六百もの茶盃が作られました。



王仁三郎は土をこね、形を作り、色を付け、一つ一つの作品に祈りをこめて作りました。こうして出来上がった茶盃を「これは宝玉だ」と訪れた人々におしげもなく手渡ししました。

明日の茶盃「耀盃」

王仁三郎が昇天した翌年の昭和二十四年、陶芸評論家・加藤義一郎は、王仁三郎の茶盃を見て非常に驚き、『その色彩とリッチさ、茶盃の姿、芸と人格、天才』と、その日の日記に記しています。

そして、美術専門誌『日本美術工芸』に「耀盃顕現」と題して発表。

「絵は南欧の陽光の下に生まれた、後期印象派の点描を偲ばせ、ルリ・緑青・黄土・エンジ・ゴフンなど、みな日本離れした冴えにかがやく。ことに刷き上げるエンジの色は妙えに美しい」

と評し、一躍脚光を浴びました。

さらに「これこそ明日の茶盃でなければならぬ」として、王仁三郎の茶盃を「耀盃」と命名しました。この「耀」は、星の輝きを意味します。



いくつかの耀盃と、観賞のポイントを紹介しよう!



鑑賞のポイント その2

【あざやかな色彩】

焼き物に複数の色を一度につけると、それらは混ざり、焼き上がりの色はたいてい濁ってしまいます。しかし、耀盃は一つひとつの色がとても鮮やかです。「どうしたらこんな色になるのか」その不思議さは、専門家が首をかしげるほどです。



みずがき 「瑞垣」



てんごく にじゅうはち 「天国 廿八」

鑑賞のポイント その1

【表面の穴や刻線】

耀盃の表面には、無数の穴が穿たれています。この穴は、王仁三郎が祈りを込めて穿ったものです。また、高台の回りや胴の部分には、フォークでつけた3本の刻線がみられます。

こうした穴や刻線による凹凸はさまざまな角度で光を反射し、耀盃をさらに輝かせています。



ぎょゆう 「御遊」

鑑賞のポイント その3

【さまざまな銘】

耀盃には、「天国」をはじめ、「天つおとめ」「潮音」「だいだい」「翁」など、さまざまな銘がつけられています。

耀盃を観賞するとき、それぞれの銘にも注目して、イメージを深めてみましょう。



つき 「月」

獄中で練られた構想

昭和十年から始まった政府による弾圧(第二次大本事件)により、王仁三郎は投獄され、六年八カ月もの間、獄中生活を送りました。

過酷な環境にありながらも、独房のなかで、王仁三郎は森羅万象を思い描きました。空想の中で、茶盃作りの構想を練り上げていたのです。

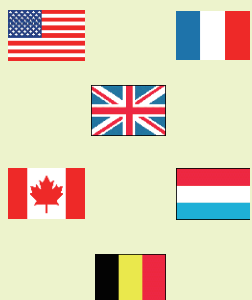


出所から数年後の昭和十九年の十二月末、王仁三郎は、それまで思い描いていた構想とエネルギーの全てを注ぎ込んで、楽焼き茶盃を作り始めました。



海外から高い評価

昭和四十七年、耀盃は海を渡ります。『芸術の都』フランスのパリ市・セルヌスキ美術館で、「出口王仁三郎およびその一門の作品展」が開催されました。この作品展は高い評価を受け、当初六週間の予定が二カ月にまで延長されました。マルセイユでは、地元の新報に「天国を映し出した茶盃」と紹介されました。



その後、諸外国からの開催の申し入れが相次ぎ、フランス・イギリス・オランダ・ベルギー・アメリカ・カナダと、合計六カ国で作品展が開催され、約二十五万人の人々が来場しました。